

## ■ PC の発展性



山 崎 淳\*

2009年が過ぎようとする今、厳しい社会情勢に照らしてPCの発展性を会員諸賢とともに確認しておきたい。

数年来、生産・経済・生活環境の基盤に対する従来の公共投資を福祉に振り替えるとの名目により、PCに関わる事業の発注量が約十年前のほぼ半分になったことから、この産業に従事する優れた専門家の多くが早期離職や転職を余儀なくされている。永年の献身と修練によってのみ到達し得る専門技術と見識は行き場を失っている。今は、それらの人々がいかなるすべであれ生き永らえて、新たな時代の展開に備えてくれることを祈るばかりである。

そのような損失にもかかわらず、PCの発展性のエネルギーは蓄えられている。ここ15年ほど(1995頃～2009)に顕著になった建設技術の進歩、それが遺した建造物の数々、それによる産業活動の強化拡大、民生の向上と持続する進歩への予感、建設の優れたマネジメントの具現、世界各国からの評価、未来の技術者の関心、など、平和的生産技術がもたらすべきすべての面での効用が達成された。その証左を、道路橋を例に見てみよう。

第二東名神の数百を数える橋梁・高架橋と、数は少ないが、地方自治体の地域の民生、僻地のライフラインや通学路のための建設事例で世界が注目するほどに技術上重要なものが現出している。プレストレスの力学原理が生かされる構造形式の進化、プレキャストセグメントの精密化、部材の組立て方法の精緻化、コンクリートと鋼材および接合方法による複合化技術、などが技術の要因であり、それらを従来の限界を超えて適用し得るとの判断と勇気は、強大で優れた組織の存在

とそのよいマネジメントに支えられてきた。技術の精華が数々の構造物に結晶し、技術遺産として後世の学習を待っている。大学進学を目指す高校生の志望理由が、見た橋への憧れと述べる者が多い。高校生にそんな目標を遺しえたことは喜ばしい。世界の日本の橋梁建設への共感は、fib創設第1回コンgres大阪大会以来着実に高まってきた。PCの大国フランス、ドイツばかりでなく国の規模は比較的小さなオランダ、イタリア、スイス、ギリシャ、ハンガリー、スペイン、クロアチア等、またアジアの大国インドなどの人々との交流が経常化している。

橋梁建設の発展の牽引力であった日本道路公団(1956～2005)の公共のための技術を根幹とした産業主導組織のエトスは、Autonomous Public Authority、とワトキンス報告書に記されていた。あらゆる圧力からの自立、家族や親類の延長上としての公共、専門見識と倫理あればこそ仰ぎ見られる権威、技術提案のボトムアップとトップダウンへの即時性による実行権限などは、普遍性がある。数千人規模の優れた組織人の強大な組織であればこそ成しえた建設的産業の生産性もあった。さらに組織外から識者を招請し意思決定を透明化していた。技術開発は冒険と挑戦でありリスクを伴う。なれば、技術規準の精神の厳守や、科学性や倫理の厳密にのみ依拠し世俗の圧力からの自由が、緊張力ある組織運営で維持されていたと思われる。そのような組織を失った今、その機能を個人の内にももつことを目指し、かつネットワークによって代替することが、発展性の鍵のひとつではないか。当協会はそのような動きのために機能し得るであろう。

\* JUN YAMAZAKI : 本協会理事 日本大学 理工学部 土木工学科教授